談叢

櫻島噴火の見た儘

簡堂閑人

大正三年一月櫻島火山の噴火した當時は、福岡縣直方町附近を旅行中であつたが、破裂の當日卽ち十二日は、直方町でも終日戸障子のガタ〳〵する震動を感じ、家根や椽などには細い灰砂が降り、十二日夜八時頃には性質稍急劇な地震を感じた、其時の主なる震動の方向は、略南北である樣に思はれた、十八日福岡市の寓に歸つて聞けば、矢張り十二日には終日戸障子の震動を感じ、火山灰も降つたといふ事であつた。

福岡から鹿兒島に向つたのは一月二十六日であつたが、汽車の窓から觀れば、熊本縣人吉の附近から矢岳に至る間、人家の家根にも樹の葉にも火山灰の降つたのを見受けた、其が鹿兒島に近づくほど多く、横川附近では厚さ二三分、加治木附近では、二三寸もある樣に見え、重富附近は却て少ない樣に見受けた。

一月二十七日早朝から、櫻島の西麓の小丘城山(俗稱袴腰)に登つて、噴火の實況や熔岩分布の狀況を觀察した、當時櫻島の東西兩側十數個處から猛烈に噴火して居て、轟々の音は恰かも百雷の轟くが如く、海中に流れ込んだ熔岩の端からは盛に水蒸氣の白雲を奔騰して居て、實に何ともいへない物凄い光景であつた、櫻島の西側中腹から流れ下つた熔岩流は、東々北から西々南に、長さ約六七百間舌狀(カフス)を爲して海中に突出し、烏島は全然其中に包まれてしまひ、城山西北の低地も大部分熔岩の原と爲て居た。

氣溫は十二度(攝氏)であつたが、鹿兒島市から船で城山に行く途中の海水は十八度、城山の海岸では二十二度、熔岩流の末端を距る約百間の海水は三十五度で、十五間ばかりの處では五十七度あつた。

城山の渚には、馬の斃れたものが約二十頭も

並んで其儘に爲つて居つた、是は十二日の大破裂に逃げて海岸まで來たのが、住民は船に乘りて對岸へ避難したが、倉卒の際の事で家畜までは手が屆かず、遂に遺棄せられたものと思はれ、實に慘鼻の光景であつた。

熔岩流は飴の流れた樣な有樣では無く、多角狀の熔岩片が千態萬狀に積み累りて居る所謂塊狀熔岩（Block Lava）で、熔岩原の表面は鋸齒狀を呈し、到る處瓦斯を盛に噴き出して居て、地獄の劍の山も斯くやと思はるゝ物凄いもので、表面は先づ冷却して暗褐色又は赭褐色

噴火中の櫻島

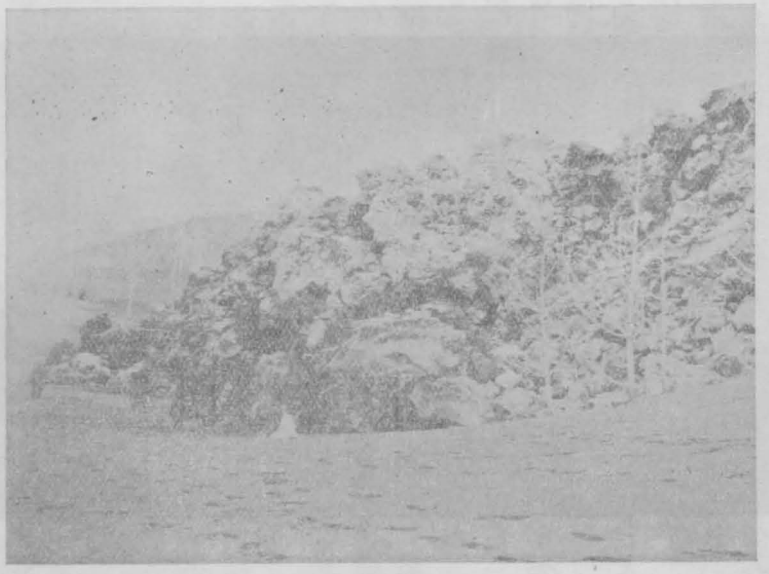
が處々に散落して居る、是は猛烈な勢で押し出

鑛滓狀であるが、破壞する時內部を觀れば尙赤熱の熔態である、城山麓の熔岩流末端に近づけば熱氣と瓦斯臭とで堪へがたい程であつたが、强て走り近づき熔岩の割れ目に寒暖計を瞬間挿入して見た處が、忽ち百度に上つた。

此の塊狀熔岩の性質は、頗る粘稠性であつて、其流下する有樣は、大小無數の岩片が半固半流の狀態で雜然と押し出すのであつて、徐々として進み、熔岩流の末端は、大小の岩片が堆積して、高さ數十乃至百尺以上の斷崖を爲し、附近にも岩片

して來た時に、高い處から轉落したものである、浮石や火山灰の樣な輕粗なものは、重い熔岩流の爲めに押し出され末端に於て熔岩を厚く被覆堆積して居るのを目擊した。

當時城山の東北赤生原で、熔岩流の末端は、海岸から約五百間、熔岩緣の方向は正しく東西であつた、赤生原部落の跡は、全然浮石や灰に被はれ、一望荒涼たる燒野と爲つて居た。是は十三日午後八時半、雷火によりて火災を起し、僅々約四十分間で、全部落が燒けて了つたといふことである。



黒神方面熔岩流の末端

城山（袴腰）に登れば、樹木は悉く丸坊主に爲つて居て、地面には大小無數の圓錐形の穴が出來て居た、其大さは直徑五、六尺から二三間のものが最も多く、稀には四五間もあるのを見受けた、深さは二、三尺が普通で、大いのは七、八尺のもあつた、是は噴火の際大小の岩塊が非常な勢で落下した時に掘られたもので、穴の底に岩塊の一部が頭を出して居るのもあり、灰や砂で底の下に埋沒して石の見えぬのもあり、中には石が穴の外に飛び出して居るのもある、是を噴火の際猛烈であつたのは雷の落ちた跡だと思つて居つた人もあつたのは

滑稽である。

一月二十八日櫻島の北岸西道（サイドウ）に上陸し、櫻島山東側の活動を見物する爲に海岸を縫ふて黒神村に向つた、山野は全く火山灰に埋れて、木の葉にも火山灰が堆積し、景觀は雪中と同樣で歩行は存外樂であつた、降灰の深さは五、六寸で馬小屋の外、人家には倒れたものは無かつた、が黒神村に近づくに從て降灰多く、黒神村では、灰や浮石の堆積せる厚さは、四、五尺に達し、人家は其下に埋沒し、蒸し燒に爲つて居た、神社の華表が頭部丈灰の上に露はれて居るのを見つゝ、黒神村西南の高地に登り、櫻島の東側鍋山の新噴火口に近づき得る限り近寄て、約十町許りの距離から噴烟の狀況を觀た、其活動は櫻島西側より遙に猛烈で、黝黒色の烟柱が五、六本高く天に沖し、上方は傘を開いた樣に擴がり、噴火口からは、恰かもボロ綿を繰り出す樣にムク〳〵と眞黒な雲烟を噴き出しゴーゴーと轟く音は地にも震動を與へて、地磐も崩れはせぬかと思はれ、空中からは泥の小片と劇雨が沛然として風下の方に降り來り、其の雄大にして物凄い光景は、到底眞相を書き顯はし得ない、暫く眺めて居る間に、鍋山

鍋山の噴烟

の肩部に於ける噴火口の内部から赤熱の熔岩が盛り上るのを觀た、其が火口上に段々高く盛り上る間、黒烟の騰る勢が一時少康を保つが、盛り上つた眞赤な熔岩が遂に倒れて、山の側面にダラ〳〵と擴がると觀るや否や、劇烈なる鳴動と共に、例の古綿狀の黒烟が猛烈な勢を以て高く空中に騰りて四方に擴つた、熔岩の流下するのを側面から觀れば、恰かも赤蛇が山背を這ふ樣で、至てノロイものである。

黒神溫泉場に下り、船に乘りて、櫻島と大島と間の瀨戸に進入した、この間海面には浮石が一面に浮んで餘地少なく、鍋山噴火口の風しもに當りて居る爲め、火山灰を雨で固めた粒狀の土が盛んに降て來て、眼も開かれず。

『黒神や輕石の海わけ行けば鍋山鳴りて土の雨降る』

と腰折つては見たものゝ、實際は頗る困つた、兎角する中に船は進んで愈〻瀨戸に近づいた處が暮色は土の雨で一層暗く、瀨戸に押し出した熔岩は、處々に暗礁を爲し、其水に接する處から、盛に水蒸氣を擧げて濛々咫尺を辨せず、試に驗溫器を海水に入れて見れば、六〇度乃至七〇度（攝氏）を示した、流石氣丈の船頭も是處に至りて身震ひして、直に船を廻さうと謂ひ出したが、モウ是處まで深入りしては進むも退くも危險は同程度だ、寧ろ險を冒して瀨戸を突破して了へと、盲滅法の命令に、不平不安の船頭も强ては拒み得ず、一同戰々兢々裡に辛うじて瀨戸を無事に通過し得たが、實に鋒刀を渡る底の冒險であつた、後に聞けば、十二日の噴火以來、この瀨戸を通過した船は、海軍の水雷艇の他一二艘のみで、翌二十九日には、瀨戸は全く熔岩で閉塞せられて了つたのであるから、當時瀨戸の幅は蒸氣の爲め十分には判らなかつたが、恐くは僅か五六間に過ぎなかつた樣で、自分等の通過したのが、瀨戸舟行の最後であつたに相違無い。

瀨戸を越して後、日は全く昏れて生憎月は無く、折柄西北の風は吹き荒みて波は高く、寒さは刻々加はれど船は遲々として進まず、頗る困

難であつたが、百方努力し、鹿兒島埠頭に着いたのは翌二十九日の午前二時頃であつた、併し暗夜に櫻島の南方海中から眺めた熔岩流の火の原と、噴火口上紅焰天に漲ぎる壯觀とは、實に前記の艱難を辭せざる者にのみ許された天賚で容易に二度とは觀られぬ尊嚴雄偉の光景であつた。（完）

文檢地理科豫備試驗問題（第四十三回）（大正十四年十月）

一、北海道本嶋の地圖を描き其の地形につきて述べよ
二、フランス國の地圖を描き其の住民につきて述べよ
三、本邦近海の海底の狀況を說明せよ
四、地殼漂移說の概略を述べよ
五、インドの産業につきて述べよ
六、アフリカの人口密度を記しその自然との關係につきて論せよ
七、左の諸項につきて知る所を記せ
（イ）寺洞
（ロ）レッドリヴァー Red River
（ハ）サンペドロ港 San Pedro
（ニ）陣風線 Squall-line
（ホ）斷層角窪地 Fault-angle depression

地球學團岡山支部近況

第六回例會、六月十四日津山町西方香々美川流域（津山盆地の一部）を見學す參加人員二十名。

第七回例會、七月五日岡山縣師範學校に開會、來會者三十六名、左記研究の發表ありたり
一、有色人種の擡頭に就て　西大寺高女　岡本信太郎君
二、麥稈眞田に就いて　福山中學　花田秀太君

午後日東製氷會社下石井工場を見學す。

第八回例會、九月二十日岡山師範學校に開會、來會者三十九名、左記旅行談ありたり。
一、高島炭坑に就て　福山中學　花田秀太君
二、長崎、佐世保、島原、溫泉岳、視察談　岡山二中　森壽美衛君
三、滿洲視察談　西大寺高女　岡本信太郎君

猶浦上君の北京天津方面の視察談ある筈なりしも時間の都合上次回に延期し唯寫眞採集品等の說明あり水野君は太陽黑點を觀測說明す。午後六高地質鑛物學教室を參觀し八木教授の說明を聽き散會す、歸途有志十數名は水野君宅にて再び黑點の觀測及び天文に關する參考書類を閱覽した。（浦上）